

保育学生による幼児の個別観察

－保育室における半日観察体験と振り返り－

大宮 摂子 水野 佑規子 本山 ひふみ

The Observation of Individual Children by The Students

Majoring Early-childhood Education

－Experience and reflection of the observation for half a day in nursery room -

Oomiya Setsuko

Mizuno Yumiko

Motoyama Hifumi

子どもに寄り添い子どもから信頼される保育者になりたいという保育者像に近づくためには、保育者に求められる観察を通して子どもの変化に「気づく」事をどのように身につけていくのが重要である。本論文は、保育学生が連携保育室において行った1・2歳児に対しての体験的な学修の観察記録をもとに、学生の観察に「気づき」の段階があるのかを整理した。それによって、体験的な学修後に行う学生と保育士との振り返りの時間が、学生にとって子ども理解を深める有効な機会になっていることを明らかにすると共に、双方にとって効果のある体験的な学修になるための方法を探った。

キーワード：保育学生、幼児の個別観察、気づき、保育室

keywords: the students majoring early-childhood education, the observation of individual children, realization, nursery room

I はじめに

大学内に併設されている6ヶ月から2歳児までの18名定員の保育室は、単に教職員の子どもを保育するだけでなく、保育者になろうとする学生の体験的な学修活動（以下、半日観察とする）を受け入れ、学生の子ども理解を深める学びの支援をしている。教科と連携して取り組む半日観察は、座学で学んだことを実際に連携保育室（以下、保育室とする）で体験的に学修するアクティブラーニングであり、観察の視点は、事前に授業で説明され、幼児一人を中心に観察を行う。

今日の学生たちの年代は、少子化時代にあつて、日頃の幼児とのふれあいは限られている。また、保育の現場では、幼稚園、保育所、認定こども園、その他の保育室等のどこであれ、特別なニーズを抱えた子どもたちがともに過ごしている。その中で、家庭を理解してその子に合わせた支援・援助が必要となる。それには単に子どもの行動と言語を理解するだけでなく、子どもたちの非言語の行為・仕草・まなざしなどからも心の内を観察しようとする意識が必要である。

この半日観察における保育室での学生の姿には、学生が子どもと関わっていく過程に個性があるが、観察記録にみられる観察の姿勢にいくつかの傾向があるのではないかと感じられた。例えば、2歳までの子どもの中には、十分会話が成り立たない子もいるため、子どもと手をつないで散歩に出かけても、道々何を話して良いのか戸惑い、無言で歩く学生の姿が見られる。一方、気軽に子どもに話しかけて関わりを持とうとす

る学生の姿も見られる。また、子どもとのやりとりはないが細やかな動作を観察し子どもの指さし、まなざし、仕草などからも子どもの気持ちを感じ取ろうとする学生の姿が見られる。

さらに、話さない子どもを相手に漠然と行動を観察している場合もあり、些細な変化などに気づくことは半日の観察体験だけでは難しいようである。観察後の保育者との振り返りの時間では、それを補うためにも「気づき」を増やすことが、保育者として必要な子ども理解と援助につながると、その必要性を感じた。

そこで、半日の観察記録のエピソードとその振り返りの記録から学生の子どもの理解の過程と課題を明らかにして、保育者との振り返りの時間において学生の観察に必要な「気づき」をどのように導いていくと良いのか有効な支援を見出したいと考えた。

(用語の定義)

- ・半日の観察体験学習については、日常「半日観察」と言っているため、「半日観察」とした。
- ・全般的な保育従事者については、「教諭」「保育教諭」「保育士」などを総称し「保育者」とし、特定した人物の場合は、「保育士」とした。

Ⅱ 研究目的

保育をする上で観察力・洞察力は保育者に求められる必要な力量である。その観察力・洞察力を身につけていくためには、子どもの観察を通して子どもの成長・発達や情緒の面などを理解し、その僅かな変化に「気づく」事が重要である。その「気づき」は、今後学生が保育実践をしていく中で、観察力・洞察力、そして経験知を高めていく基礎ともなる。しかし、学生が少子化時代の社会や家庭の中で子どもを観察する機会は非常に限定的な状況である。

そこで、連携の保育室を活用して半日観察を行った観察記録と振り返りの記録から学びの傾向を探り、学生の観察力をどのように高め、身につけていくのかより子ども理解を深められる支援とは何かを明らかにするとともに、保育室側にも保育の質の向上に効果があることを明らかにすることが目的である。

Ⅲ 研究方法

1. 先行研究により、学生の観察における「気づき」の重要性や意味を明らかにする。
2. 対象学生に教育実習指導Ⅰの授業内において、保育室での半日観察の意義を伝える。
3. 対象学生を一日に3名ずつ割り振り、学生は割り当てられた日程に保育室での半日観察を実施する。
 - (1) 期間：2018年度は、5月～9月にかけて半日観察を実施した。(計21日程)
 - (2) 参加者：2年生 63名。
 - (3) 観察対象となった幼児は1歳児8名・2歳児6名である。
 - (4) 観察後に観察シートの提出を求める。
4. 記録を分類し考察する。
 - (1) 観察シートをエピソード記述、振り返り、保育士への質問、次への課題にグループ化を行い分類する。
 - (2) 分類した項目について対象児の年齢別に考察する。

学生の幼児理解について対象児の年齢ごとの特徴や傾向を分析し、観察の効果を確認する。
 - (3) 学生の観察力を伸ばすための支援方法を考察する。
5. 保育士側の意識について検討する。

学生との振り返りの時間に対する保育士の対応意識について聞き取りを行い、保育室側の効果を探る。

 - (1) 学生との振り返りで、保育士が意識していることを聞き取る。
 - (2) 年齢別、個別の幼児理解について保育室として援助する方法を導く。

IV 2018年度の半日観察の概要

1. 半日観察の位置づけ

本学の学生が経験する最初の学外実習は、2年次11月頃に行う幼稚園実習である。「教育実習指導Ⅰ」では、この幼稚園実習に向けた事前指導として、実習の意義・目的や、実習に臨む態度、実習記録や指導計画の書き方についての講義を行い、演習を通して習得することを主な内容としている。しかし、この授業だけでは実習に向けて実際の子どもの様子や園の流れについて十分に理解することができない。そこで、本学では実習の準備段階として、実際に保育の現場に訪れる機会を二度設けている。

一度目は、1年次後期「実習入門」の中で行われる園見学である。これは学生が8名～10名程度のグループに分かれ、大学近隣の各保育所や幼稚園の半日観察を行うものであり、保育所や幼稚園における生活の流れを理解することや、保育者の職務を理解することを観察の主な目的としている。

そして二度目が、2年次前期「教育実習指導Ⅰ」の中で行われる学内保育室での半日観察である。これは、5月から9月にかけての木曜日（夏休み中は火曜日と木曜日）、割り振られた3名の学生が本学の保育室において半日観察を行うものである。ここでは対象を1～2歳児のうちの一人に定めて観察し、子どもの言動から一人の子どもの思いを理解することを観察の主な目的としている。それに加え、担当の子どもと手を繋いで散歩へ出かけたり、排泄の援助をしたりといった子どもと直接関わりを持つ機会も得ている。

学生から提出された半日観察の記録を確認すると、言葉にならない子どもの思いをなんとかとらえようとする姿勢が見て取れる。また、発達段階や性格が異なる一人ひとりの子どもに合う援助方法はそれぞれ異なることに気づく一方で、対象の子どもへの言葉かけや関わりに戸惑ったという感想も多くみられる。保育室は満6か月児から3歳未満児を対象とした施設であり、幼稚園実習で触れ合う幼児と年齢は異なるが、実際の保育現場においてこうした経験や気づきをしておくことは非常に重要なことであり、学生は保育室での半日観察を通して自己の課題を明確にし、幼稚園実習に向けてのイメージを具体的に膨らませてより一層意欲を高めるのである。

2. 半日観察に関する事前指導の内容

学生には、「教育実習指導Ⅰ」の授業内において、保育室での半日観察は個別の子どもを観察し、子どもの言動から一人の子どもの思いを理解することが目的であると伝えた上で、以下のような事前指導を行っている。

（1）保育室における観察方法と観察視点について

観察記録は、ニュージーランドのマーガレット・カーが開発した「ラーニング・ストーリー」の考えを参照にした、図1の様式である。学生には、対象とする子どもの姿の一場面を捉え、「子どもをみる視点」「何かに興味を持っている」「夢中になっている」「チャレンジしている」「気持ちを表現している」「自分の役割を果たしている」のどれか当てはまるものに丸をつけ（複数可）、「ラーニング・ストーリー」の枠内には印象に残ったエピソードを文章で記述し、「タイトル」の枠にエピソードにふさわしいタイトルをつけるよう指導した。また、「振り返り」の枠内には半日観察を自ら振り返った反省を記入し、「次への手立て」の枠内には、半日観察の振り返りの時間に保育士の方々から教えていただいたことをふまえた考察を記入するよう伝えた。さらに、子どもの思いをとらえて記録する練習として、アニメ映画の一部分の映像を流し、その中に登場する一人の子どもの姿を追って、記録する試みを行った。学生にはこの記録を提出させ、教員

AS 保育室観察記録『ラーニング・ストーリー』

タイトル					
対象児	イシヤルで記入 姓 名				
観察日	年	月	日	曜日	時間
指導教員 保育士					
子どもをみる視点	ラーニング・ストーリー				
何かに 興味を持っている					
夢中になっている					
チャレンジしている					
気持ちを 表現している					
自分の役割を 果たしている					
振り返り	次への手立て				
<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> 指導教員 名前 </div>					

図1 観察シート

が記述内容を確認した。

学生の記録用紙に目を通したところ、多くの学生が場面を限定せずに、子どもの行動のみを順に追って流れを示すような書き方をしていた。記録はそれをもとに保育者と話し合う役割も担うため、他の人が読んでその時の子どもの様子が目に浮かぶように書くことが重要である。それにはまず、印象的な場面や子どもの心が動いたと感じた場面をとらえて抜き出すこと、次に、その場面について、子どもの行動だけではなく、表情、仕草、様子を具体的にとらえること、さらに、それらから読み取ることのできる心情についても記述することが必要となる。翌週の授業において、こうした観察視点のポイントを再度説明した。そして、このような記録を書くためには、子どもの表情や仕草を細かく観察する必要があることを指導した。

（２）半日観察に臨む心構えや注意点について

保育室は本学園に付設した施設ではあるが、今回は実習生としてお世話になるため、緊張感を持って臨むよう指導し、集合時間、挨拶、服装、持ち物、身だしなみについての確認を行った。また、実習生は子どもにとってモデルとなる存在であるため、言葉遣いや態度に気を付けること、低年齢幼児は子ども同士のトラブルが起こりやすいため、何か困ったことや気づいたことがあればすぐに近くの保育士へ報告・連絡・相談を行うこと、守秘義務を守り、振り返りの時間に教えていただいた子どもの情報等は決して口外しないようにすること、といった、実習に臨む心構えや注意点について確認した。

上記 2 点をふまえ、保育室における半日観察は幼稚園実習の前に子どもと関わる貴重な経験であるため、子どもに積極的に声をかけ、関わり、学びを深めるよう指導した。

（３）幼児個別観察後の振り返りの必要性

半日観察は、各学生が園児 1 人の幼児個別観察を行うことを基本にしている。集団を観察することに重きを置くのでは、2 年生の学生にとっては、動きの活発な子や援助を多く必要とする子など、特定な状況に置かれた子に目がいってしまうことが予想されるため、対象を一人にすることで、じっくり観察することにつなげる。これは、昨今の統合保育の中で、園児一人ひとりの個性を大切にしながら援助するためにも必要な保育力である。多勢の中では、一人ひとりを観察しながら全体を見るには、経験知が必要になるが、その基礎になる意識をつけておくことは学生の観察力や洞察力を高める上で重要であると考えます。

また、そのためには観察後に保育士との話し合いの時間を設け、学生が観察した部分について保育者はどのように捉えるのかということや園児の背景を知ることでもある。さらに、学生が半日観察で学んだことを振り返り、記録することは重要なことであり、その日の気づきを記録し、保育者と一緒に振り返ること、より子ども理解を深めることができると考える。このような体験が、将来、保育者として保育カンファレンスを行う際に、多面的な見方で話し合える基礎力につながってほしいと願っている。

（４）保育室での半日観察の実際

事前に「教育実習指導Ⅰ」の担当教員と保育室の保育士・保育主任・室長を交えて、どのように観察を進め、振り返りにつなげるかについて打ち合わせを行っている。それを踏まえて、観察当日、保育室にて学生に伝えている事は以下の内容である。

1) 子どもへの基本的な対応について

- ① 子どもの命を預かる仕事であるため、危険なこと何か気づいた点は担当者に伝えること
- ② 0～2 歳児までが一つの部屋で過ごしているので、子どもの声をかき消さないようにモデルとしての大人のふるまいを心掛けること
- ③ 一人の子をじっくり観察するが、子どもたちは数人一緒に活動する事が多いので、周りの子にも声

をかけたり遊んだりして関わろうとすること

2) 半日観察の流れと基礎情報

- ① 学生 3 名に、観察するそれぞれの園児の名前を伝える
- ② 本日の園児の体調や機嫌など通常の様子との違い、疾患などの気をつけなければならない事項を伝える。しかし、「〇ちゃんは、こういう子で・・・」という先入観は持たせないように性格等は敢えて伝えない
- ③ 保育室での衛生面やルールについて確認する
- ④ 日程

9:00	挨拶及び半日の時間割の説明 担当年齢および担当者と園児の紹介 朝の受け入れの様子や園児が朝の支度をする様子を観察 受け入れ・視診についての説明
9:15	朝のおやつの様子を観察 担当の園児と一緒に担当グループに入り半日観察
11:30	担当グループの半日観察を終え、12:00 まで観察シートの作成
12:00 頃	担当保育士、保育主任、室長と共に半日観察の振り返り
12:30 頃	終了

3) 振り返りのための課題

子どもの観察をじっくり行うために、観察する一人の子を指定するが、一緒に活動するグループの子は複数人いるので、全体も観ることを伝える。積極的に子どもと関わりながら学ぶことを伝えている。また、振り返りの時間に一人の子を観察して学んだ事と考察、全体を通して学んだ事、不明な点を保育士に自ら質問するようあらかじめ伝えている。

(5) 半日観察後の保育士との振り返りの実施内容

1) 振り返りについて

- ・参加者：保育室長、保育主任、担当保育士
- ・振り返りの時間：30 分～40 分程度（学生の質問数や内容により時間は変動する）

2) 振り返りの具体的な内容

- ・学生からは、①観察したこと、②エピソードから考察したこと、③全体を通しての学び、保育士への質問を聞いている。
- ・学生の発言を受けて、年齢児を担当する保育士が話す。
- ・一巡してリラックスしてくると疑問や質問などが出てくるため、さらに気づいたこと、質問などを聞く時間を作っている。
- ・担当保育士側は、学生が感じた事、考えた事、質問に対して保育士の見方や意図しているところを伝えるようにしている。また、保育主任が、全体を通しての学生の姿勢や気づきについて感じたことを伝え、室長は、進行役を務め授業との結びつきと保育で大切にしたいことを伝えるように心がけている。

3) 半日観察後の振り返りについて

学生側は、観察シートに半日の観察の中で学んだこと、子どものエピソードから考察したこと、保育士との話し合いから理解を深めたことなどを記録して提出する。

保育室側は、園児の背景や保育の中で意図して援助したこと、子どもの成長をどのように見ているかなどを伝えるようにしている。その日の保育実践の中で、学生の印象に残ったエピソードにどの部分が語られているかを知り、保育室側の次の保育につなげていきたいと考えている。

V. 研究結果

1. 気づきの重要性和保育学生の観察

保育者の存在は人的環境として子どもに大きな影響を与える。汐見・大豆生田（2018）は、保育者の専門性とは保育技術などの「『見えやすい』専門性と『見えにくい』専門性」があり、見えにくい専門性の中には、「子どもを『見るまなざし』（内面理解）」が必要である。さらに、「保育者として成長していくために『ふりかえり』と『省察』が欠かせない」と述べている。また、倉橋（1934）は、保育者の資質について要約すると、次のように言っている。「第一に、先生というものは、心使いの細やかさということ、気が利いているということ。第二に、先生のその存在と言うものが子どもの世界を抑えるような強い存在になっていないこと。子どもに対してはどこまでも強く響かず、しかし、その先生が幼児たちのために実に周到な力強いいっばいの活動をしている人であること。第三に、子どもをよく観察し、一人一人の子どもから方法が生まれてくると考えること」であり、保育者として大事なことは、子どもが帰った後、今日一日自分の保育がどう行なわれたか、子どもたちがどう生活したかを振り返ることである。

このように保育者には、保育者主導で子どもの世界を押さえようとするのではなく、子どもの目に見える行動や行為、仕草や表情などから子どもの内面理解をすることが必要であり、その日の保育実践後の振り返りと省察から次への手立てを考えることが保育者の資質として求められるものである。この「振り返り」と「省察」について、高島・森上ら（2011）は、エピソード記述を基に保育現場で行われる話し合いを保育カンファレンスとして位置づけ、専門性を高める有効な方法であることを示唆した。エピソード記述の重要性は、鯨岡（2013）が「心の育ちも含めた子どもの発達理解の大切さ」を伝え、「心の育ちが喫緊の課題」であり「保育の振り返りの基となる記録は子どもの心の動きを捉えていなければならない」と言っている。また、岩田（2011）は、幼児理解のための子どもの見方について「子どもを〈みる〉力や子どもを保育〈する〉力にエピソード記述を基に他者との話し合いの場が、保育の質を高める力へ相互循環的につながっていく」と述べている。

また、観察に必要な「気づき」をステップアップしていく段階について『保育実践における保育者の気づきの意味』（2018：吉田・中川・片山論文）の中では「保育者の観察は、幼児の内面を理解しようということから始まる。保育者が『気づく』ことを明確にする必要がある」と述べている。「子ども理解と保育者の熟達化との関連」の5つの段階（志賀智江（1996））を踏まえ、さらに吉田ら（2018）は、「第1段階として、五感で受け取る『瞬間的』『直感的』『無意識的』で、なんとなく感じる。気になるという気づきがある。第2段階は、見えたことや直感とほぼ同時、あるいはほんの一瞬の思考で捉える、目には見えないが『こうであろう』と推察する子どもの思いや心の動き、同時にそこに現れた行動の背景を読み取る気づきになる。実践の中の省察が第2段階の気づきにつながる。」としている。

これを踏まえ、まず、学生が観察をしたときに第1段階の五感で受け取る感性を磨いておきたい。第2段階の目には見えないが「こうであろう」と推察する意識は、1～2歳児の観察を通して言語で理解するだけではなく非言語の行動やまなざし、仕草などから理解することでその基礎を形成していくことになるだろう。それは、保育者の熟達化における第2段階への土台になると考えられる。これらの段階を考えるにあたり学生に一人の子どもをじっくり見る機会が早めにあり、言語だけでなく子どもの仕草や行動、指さし、まなざしなどの表出表現に気づく感性を養うためにも観察体験を行うことの意義は大きいと考える。

このように、子どもを観察して理解することは、子どもの心（内面）を知ることである。また、保育者は、子どもの行動をよく観察しその子の心に寄り添い、気持ちを向けることでその子の気持ちを感じとる「感性」

が必要である。

保育の現場では、「気づき」という言葉を使うことが多く、その気づきを磨いていくために、入江・小原（2019）は、子ども理解を深める 3 つの視点をあげている。「1 つ目は、いつもの様子と違うことに気づくことが理解を深めるきっかけになるため『見て理解すること』である。2 つ目は、関わってこそわかる気持ちがあるので『関わりながら理解すること』3 つ目は、子どもが真剣に取り組んでいることは、その子にとって意味のあることは事実なので『そばにいて考え続けながら理解すること』である。」このように学生が、観察を通して子ども理解を深めていこうとすると、「自分が、子どものためになると思っているから」と大人の思いが先行するのではなく、主体を子どもにおいて観察し、共感的理解を深めていくことが重要である。

2. エピソード記述から読み取れる学生の観察内容

学生の観察シート（図 1）のうち、エピソード記述部分を用いて学生の幼児個別理解を見てみた。

（1）エピソード記述部分の分類と例示

観察シートのうち、エピソード記述部分から学生がどのような観察をしているのか分類を試みると、以下の 3 つに分類できた。

1 つ目は、「行動観察」（言語が聞き取れないなど、介入なく子どもの行動を観察したもの）である。

2 つ目は、「内面観察」（行動観察だけでなく、子どもの指さし、まなざし、仕草、表情等から察したもの、子どもの発した声などに反応して話した場面を取り上げたもの等）である。

3 つ目は、「保育者の援助観察」（保育者の関わりを観察したもの）である。

以下、観察シートの記録から一部要約して例示する。

1) エピソード記録：「行動観察」

タイトル：「自己表現」（1 歳児）

8 月生まれの A 児は、4 月生まれの B 児（人形をおんぶしている）に

『パンダ』の絵本を

A 児「よんで」

B 児「いいよ」とページをめくって見せてくれる

A 児 次々に絵本棚から別の本をもってきて「よんで」

B 児「いいよ」と、このやりとりを何回か繰り返す

〈学生の振り返り〉 言葉がはっきりせず、返答に困ったが、1 歳児でも言葉のやりとりができると知り、友達との関わりに驚いている。

〈観察の分類〉 この観察は、学生がこのやりとりをどのように考察したのか記述に表されていないため、「行動観察」とした。

2) エピソード記録：「内面観察」

タイトル：「洗濯バサミで動物の顔作り」(1 歳児)

1 歳児の玩具に洗濯ばさみの手作りおもちゃがある。動物の顔の周りに洗濯ばさみを挟んでつけるおもちゃで遊んでいるときのこと、カエルを選んで

C 児「これがいい」と学生にいい「これにつけるの」

学生「うん、顔の周りに洗濯ばさみをつけるんだよ」

C 児 やってみるがうまく挟めない

学生「挟むところの端っこを持って力を入れるといいよ」とはさみ方を見せる

C 児 学生の真似をして同じようにすると大きく洗濯ばさみの口を開けることができた

学生「すごいね。できたね」笑顔で学生と顔を見合わせる

C 児 うれしそうに学生を観て 2 つ目の持ち方も確認するように見た。2 つ目の洗濯ばさみも真ん中の方で持っていたので、持ち方を教えるとそれを真似してできたことを喜んだ。3 回目は自ら洗濯ばさみの端っこを持ち動物の顔につけることができたので、

学生「すごいね。自分でできたね」

C 児 笑顔でうれしいということを表現した

〈学生の振り返り〉 子どもと話すときにどんな言葉かけをして良いか、今の声かけは適切であったか考えてしまう。子どもが遊んでいるときにたくさん声をかけるよりも見守りながら何かを達成できたときに共感できるように次の手立てにつなげていきたいと考えている。

〈観察の分類〉 これらの振り返りや次への手立ての記録から、学生と子どもの交流が見られ、子どもの表現を見ながら言葉をかける、見つめるなどの共感をしあう姿があり、内面を理解しようとする姿が見られるので「内面観察」とした。

3) エピソード記録：「保育者の援助観察」

タイトル：「アイスクリーム屋さん」(2 歳児)

D 児は、公園の滑り台の下でアイスクリーム屋さんをして遊んでいる

D 児 「アイスクリーム屋さんです。何アイスがいいですか？」

保育士 「イチゴアイスをお願いします」

D 児 「少し待っていてください」と小さな石をアイスに見立てて
遊具の隙間からアイスを渡す

保育士 「いくらですか？」

D 児 少し考えて「50 円です」

保育士 小石をお金に見立てて渡す

D 児 「ありがとうございます」と笑顔で応答する

次は、店員の役割からお客さんに代わって D 児「抹茶アイスください」とお金を渡してアイスを受け取ると、その後は店員をやりアイスクリームの種類が増えていった

〈学生の振り返り〉 2 歳児はよくしゃべり、あった出来事を伝えてくれる。その中で、自分たちの遊びに取り込んで関連させていっていると観察している。

〈観察の分類〉 この観察は、保育士と子どもがやりとりをしている様子を見ているもので、店員とお客さんの役割を代わった子どもの気持ちにも触れていないので「保育者の援助観察」とした。

(2) 対象児の年齢ごとの学生の観察傾向

対象年齢児の年齢ごとに観察場面を 3 つに分類し、さらに、それが言語における場面か、非言語の場面かで分けて整理した結果、表 1 のようになった。

※保育者の援助観察と子ども観察と併せて観察しているなどの場合は、該当するところに (内) と表し、複数数値化している。

表 1 学生の観察傾向

観察年齢・学生数	1 歳児：観察学生 26 名		2 歳児：観察学生 37 名	
観察分類	言語観察	非言語観察	言語観察	非言語観察
行動観察	7		1 8	
内面観察	8	1 0	1 8	1
保育者の援助観察	6 (内 5)	4 (内 4)	1 1 (内 11)	

1 歳児は、言語がでている場合もはっきりと聞き取れないことも多く、指さしや仕草、動作、まなざしなどからくみ取ろうとする観察の姿が見られ、非言語観察が多くなった。

学生は、遊びでは子どもから受け入れてもらえても排泄・着替えのプライベート部分では拒否されることもあり、生活習慣の自立に向けての援助の仕方に戸惑う。どのように関わって良いのか、また、どこまで手を出して良いのかに不安を持ち保育者の援助を見ている場合や危険な場合の援助の仕方を観察していることが確認できた。

2 歳児では、言語による観察がほとんどだが、子どもが熱中して遊んでおり声がかかけられず観察している姿も窺えた。また、行動から内面を理解しようとする姿が見受けられた。

保育者の援助では、子ども同士の関わりの中で、取り合いになった場面や「イヤ」といって動いてくれない子どもの姿に戸惑い、保育者の言葉かけや介入の仕方などについて記述しているものが増え、対応の仕方を学ぶ姿がみられた。

3. 学生からの質問の内容分類

学生が、半日観察を行ってどのようなことに疑問を感じたか、保育士との振り返りの中で出された質問を整理した。その結果 (1) 子どもへの言葉かけについて (2) 着脱・排泄などの援助の仕方について (3) 保育者の援助の仕方について (4) 保育室の遊び方のルールについて (5) 子どもの発達に関する見方について大別することができた。主な質問は以下である。

(1) 言葉かけについて

- ・子どもとどのようなことを会話したら良いか (散歩の途中、遊びの時など)、何度も聞き返すと話を止めてしまうため、どうしたらいいか戸惑う
- ・散歩の時に列の間が空いてしまうが促す行動や言葉かけはどうしたらいいか
- ・着替え、片付けなど、どのように言葉かけすると自分でやる気になるのか
- ・子どもが遊んでいるとき、声をかけていいのかタイミングが難しい
- ・言葉のかけ方や返し方などどうしたら子どもの気持ちが読み取れるのか

まず、子どもの言葉やつぶやきを聞き取ろうとする姿が見られるが、大半の学生は、子どもの言葉が聞きとれないことに戸惑いを見せる。保育士が、子どもとやりとりしながら家での様子をつかんだり、子どもが話していることに返答したりしている様子に驚く姿が見られる。

次に、子どもの行為に対しどのように対応して良いか戸惑い、対応の仕方や言葉のかけ方をどうしたらいいか確認したい気持ちを表す。どうしたら良いのか全くわからない場合と子どもの遊びを制止していいのか

という点で戸惑う場合があるようだ。

さらに、夢中で遊んでいる子どもに話しかけていいかどうか、声をかけたことで遊びが中断したり気がそれたりすることが心配である、また、逆に遊びを続けて貰いたいという場面で介入すべきか見守るべきか迷うといった戸惑いが見られる。

(2) 着脱・排泄などの援助の仕方について

- ・2歳児は、どこまでできてどこからできないかがわかりづらくその判断はどうしたらよいか
- ・子どものやってほしいという思いにどこまで応じたらいいか
- ・行動の早い子、遅い子の調整はどうしたらいいか
- ・着替えている時、集中が切れてしまったらどうしたらいいか
- ・食事の介助の加減がわからない

1～2歳児の着替えや食事、排泄などの基本的な生活習慣の援助では、日頃の関わりの中で築いてきている信頼感と安心感の中で行える行為であり特に個人差もある。その日対応してくれる人にすぐに心を許せない子もいるし、特に学生には、やってくれるなら手伝ってほしいという甘えたい気持ちの子どももあり、この子はどこまで援助したらいいのかと戸惑うことが多い。

また、着替えなどは、その日の気温や衣服により着脱しにくい場合もあるため一概にここまで子どもにやらせるというものでもないため、学生にとっては、判断基準の難しい手立てと感ずることだろう。

(3) 保育士の援助の仕方について

- ・製作をした時、一緒に活動している時等、どこまで援助して良いのか
- ・プール遊びの時の水位はどのくらいまでにするのか
- ・ケンカした時、止める言葉かけを決めるラインはどこか
- ・水遊びの途中でトイレに行きたくなった子の見分け方
- ・手をしっかり握って離さないが、玩具で誘った方がいいのか
- ・遊んでいるとき、他の子も入ってきたときにその子と一緒に見るにはどうするのか

保育士の援助の仕方の確認したいことなどを質問しているので非常に具体的な例が多く、こんなときどうしたらいいか一問一答で答えがほしいということが多い。また、子どもの遊びに参加する仕方や製作の援助など、どこまで手を出したり言葉をかけたりしていいのか保育の内容に関する手立ても迷う点である。例えば、水遊び用ビニールプールへの水量も遊び方によって違ふし、遊ぶ年齢の違いにもよる。0・1歳児とともに場を共有する時間があるときと2歳児だけで遊ぶときでは違ふし、また、水遊びを始めたばかりの初夏と夏の終わりの頃では違ふことなども一つ一つ疑問に感じ学んでいる。

個人観察と集団での子どもの様子にどう対処し観察したらいいか戸惑う姿も当然ある。遊びが、みんなで行う一斉活動のような時間もあるれば、別々に遊んでいる時間もあることにすら驚きと戸惑いを見せ、学生は自分がどこについたらいいか戸惑いながら観察している。

こうした質問は、保育士自身も日常の保育を振り返るきっかけともなっている。

(4) 保育室の遊び方のルールについて

- ・水遊びの時のルールで、おもちゃを入れて遊ぶプールと入れないで泳いだり動いたりするプールに分けているのはどうしてか
- ・散歩で拾ったものを持ち帰っていいのか
- ・危険かなと思うときの見分け方

園内のルールは、そこでの生活の中から生まれてきているルールのため、一般的ではないものもある。例

えば、プールの場合は、2歳児までの子どもたちは泳ぐというよりも水遊びを楽しむが、中には、体を伸ばしてワニになったりラッコになったりと、つもりになって遊ぶ姿やバタ足をする子などもある。このような場合、水しぶきがかかって嫌な子もいるため独自に園内でルールを決めている。園児が安全に楽しく遊べるための工夫の一つである。

危険予知は、日頃の保育の中での経験知のため、次への予測は学生には判断が難しい事であるだろう。

(5) 子どもの発達に関する見方について

- ・指さしがあったがどう対応すれば良いか
- ・2歳になってくると言葉の個人差や性格が出てくるが家での過ごし方によるのか
- ・いやいや期でも全部いやでなくどういうタイミングで出てくるのか
- ・一人遊びの時なのかなと思いじっくり遊んでほしいが声をかけていいのか

学生は子どもと関わりたいが、子どもによっては見ているのはいいけど手をつなぐのは「イヤ」など自我が芽生えてきている頃であり、学生も子どもとの関わり方に戸惑う。その時のこの場面で、保育士からどのように捉えて援助しているのかを聞く機会になるので、具体的な学びになっていると思う。

学生も座学で学んだことと体験を結びつけようとする姿があり、今後の実習を重ねて深い学びにつながる初めの一歩になっているのだろうと感じている。

4. 半日観察を通して学生が得た保育観と具体的な対応方法について

エピソードと振り返りを通して、次への手立てとして学生が自ら課題意識を持った事柄を、対象年齢ごとに、保育観と具体的な対応に分けて整理し代表的な内容を示す。

(1) 1歳児について

1) 保育観

- ・寛容な心を持って保育する重要性を感じた
- ・見守ることの大切さ、多くを話すより達成したときの喜びを共感し合うようになりたい
- ・やりたいという気持ちを尊重し、気づかれないようにほんの少し手伝って、自分でできたことで意欲につながるようにしたい
- ・遊びを発展させたいと思って口出ししたが、かえって子どもの遊びの世界を壊したかもしれないので遊びの世界を認め、受け入れ、見守っていける保育を心がけたい

2) 具体的な対応方法

- ・感情が表れにくい子ども子どものことをよく観ることが大前提として重要不可欠なことだと知ることができた
- ・子どもの目線になって会話する
- ・言葉や動きで伝えようとしてくれる。言葉の前後や身ぶりなどから伝えたいことも汲み取れるようになりたい
- ・無理にではなく子どもが動きたくなるよう、その場に合わせて対応していけるようになりたい

(2) 2歳児について

1) 保育観

- ・子ども同士の会話を把握し、汲み取り、言葉がけすることを大切にしたい
- ・全体の流れを把握して子どもにあった保育を心がけたい
- ・言葉だけでなく、行動・行為にも意思が込められていることを感じる事ができた
- ・保育士の行動一つ一つに意味があるとわかった。遊びの展開の仕方、一人ひとりに合わせた遊びの関

わり方などを学び、できるようにしていきたい

2) 具体的な対応方法

- ・ 2歳児は、よくしゃべり、あった出来事とかどこに行ったとかよく話し、自分たちの遊びの中に取り込んで関連させて行っていることを理解した
- ・ 個人差があるので焦らず待つ姿勢が大切だと思った
- ・ 並行遊びであるが子ども同士で関わり合う援助をしていく
- ・ 子どもの興味・関心は些細なことから出てくるとわかった

学生が座学で学んだことを実際に観て、子どもとの関わりを体験することにより、散歩の時の会話に悩み、着替えや排泄の援助に戸惑い、1～2歳児の一緒に遊んでいるように見えて並行して遊んでいる姿を体験したり、自我の芽生えを実感したり言葉にならない言語をいかに理解するかなど、本実習前の予備段階としてこれらを体験することは、「保育の奥の深さを感じた」ようである。保育の現場を直に感じることで次への課題をより具体的に挙げて今後の学びへつなげていることが明らかになったといえる。

5. 半日観察に対する保育士の意識について

学生との振り返りでは、観察した園児の様子を聞くと、日頃見ない子どもの姿や言動があるので、日常の子どもの姿を背景として伝え、学生と確認しながら進めるようにしている。また、学生の考察を聞くことで保育室側も学びになっている。多くは、「1～2歳児の話しかけてくれる会話の中身がわからずどう応えてよいかわからなかった」、「着脱などのお世話をどこまで手を出してよいかわからなかった」などの対応の仕方の質問が多いが、時には、保育士と離れた場所で、学生と一緒に楽しく遊んでいる子たちのつぶやきや会話の内容を聞く機会になり保育士にとっても新たな発見になる事がある。

そこで保育士側は、半日観察を行うことをどのように感じ、学生を受け入れているか、保育室側の効果について保育士から聞き取りを行った。

学生との半日観察と振り返りで、保育士が意識して行っていることを年齢別の担当保育士1名ずつに聞き取りした結果、以下のことが明らかになった。

(1) 半日観察を行うにあたって、保育士が意識していること

- ① 観察前に先入観を持って観察してほしくないの、「この子はこういう子で～なところがある」とか「こういう風にやってください」というようなことを言わないようにしている。また、学生から質問があれば答えるようにしている。
- ② 交通安全や子どもの行動で危険につながりかねない行為の場合、学生にもどのように園児につき、どのような行動を取るべきか指示をしている。例えば、散歩の時には、車など危険がある方に保育士がつくことを学生に指示する。また、塀などを触って、金具で手を切る心配があるときなどは、「塀側について手をつないでみて」などの声を学生にかけることで子どもたちが安全に散歩を楽しむことを体験できるようにしている。

(2) 観察後の振り返りで意識していること

- ① 学生に一つの指導法や意見を押しつけるのではなく、「私は、こう見ている」「今は～こういう姿を見せることがある」等、生育歴を含めて、今の子どもの姿をできるだけ伝えるようにしている。
- ② 学生からの質問には、丁寧にいろいろな方法を試してみた結果、今はこうしてやっているという事を上手いかなかった事なども含めて伝えている。
- ③ 学生が、自ら子どもと関わりを持って発見してくれるよう見守り、質問があれば答えるようにしている。
- ④ 保育士同士でも色々な保育観を持っているため、話し合っていることも伝えている。

(3) 半日観察を受け入れて保育士側のメリットとデメリットは何か

保育士としては、半日観察を受け入れることで以下のように自らの学びにもつながると考えている。

- ① 学生の観察した事柄を中心とした質問に答えることで、日々の生活の中で当たり前になり無意識化していることを再認識することができる。
- ② 園児の行為や言葉・つぶやきなど細かく聞くことができ園児の様子の再認識ができる。
- ③ 個人記録を作成することが時間的に厳しいときがあるが、学生の記録から日頃、気づかなかった子どもの一面を見ることができることはうれしい効果である。

このように、保育士側も学生と半日を過ごし子どもと関わってもらう部分で、日頃見ない子どもの姿を見ることもあり、子どもの精神的な成長を感じたり子ども同士の関わりを見たり、また、「子どものつぶやき」を聞く機会にもなり、保育者自身も子ども理解を深めるきっかけとなっていることが窺えた。このように良い点もあれば、大変な部分も出てくるのは当然であり、敢えてデメリットを挙げてもらうと以下の点が確認できた。

- ① 半日観察の振り返りは30分程度ではあるが時間を費やすため、日常の個別記録を書く時間が短縮される。
- ② 学生がいることで、子どもが急な飛び出しをしたり日常とは違う思わぬ行動にでたりすることもあり、危険を伴うときには、園児と学生双方に気配りしなければならないこともある。

このように、保育士が時間的な制約と危険な行動に対するフォローの必要性を感じていることが分かった。

しかし、保育士は、「振り返りの時間が学生の子どもの理解に役立ってもらっているならデメリット部分はあまり気にならず、保育士から少し離れたところで、子ども同士で遊んでいる時の会話などを学生が把握して、振り返りの時に伝えてもらえる事は、保育士にとっても子ども理解につながる」と述べていた。振り返り後の学習を経て「最終的に書かれた記録を見て子ども観察をどのように記述してくれたのか知りたい」という意見もあがり、学生の記録を保育士にも開示してカンファレンスの資料として活用できるようにした。それにより、保育士側も半日観察の有効性を感じると共に、学生の記録を今後の保育に役立て得ることが明らかになった。

VI おわりに

学生が半日観察について実習が役立ったか、どのような学びになったかについて、拙稿『保育室を活用した保育者養成教育の事業報告書』（2018年3月）において調査を行った。対象は、2016年に半日観察を体験した学生が、2017年2週間の保育所実習を行った後にアンケート調査したものである。

アンケートの項目は、①半日観察を行って実習で役に立ったか ②実習でどんなことに役立ったか ③保育室の担当者の援助は適切であったか ④その他、保育室での体験したことで役に立ったことなどを記述してもらった結果、①の実習で役立ったかという質問については、87%の学生が役立った、非常に役立ったと回答している。余り役立たなかったと回答している学生は、もっと実習間際の頃に取り組みたかったと時期について回答している。

②の実習でどんなことに役立ったかについては、A 子ども理解 36 B保育者の援助 27 C保護者との関わり 5 D保育記録 7 E保育室の環境整備 16 Fその他 0 G未回答 3 という結果が出ており、また、自由記述では、「観察をしたり子どもと関わったりして記録を書くことで子どもたちへの理解が深まった」「一人ひとりを理解したうえで援助している姿がみられ、援助の仕方を学んだ」などという回答が多く、子ども理解や保育者の援助についての学びが多くあったことを記述している。

これらの結果からも半日観察の体験と振り返りにより観察力を高めるきっかけになっていることがわかる。

保育を志すものにとって子どもを観察するという事は、見て、関わって、そばで見守りながら子どもの内面を理解しようとする事である。

本論文では、第一に観察において目に見えない子どもの思いや心の動きを子どもの表出表現から読み取る「気づき」と、第二に保育実践の中での「省察」が気づきになる事を先行文献によって確認した。

そこで教育実習指導Ⅰにおいて連携保育室を活用し行っている半日観察が、学生に必要なスキルを身につけるための効果について、また、保育室側の効果について論じてきた。

観察は、保育を行うにあたっての基本となる。どんな時もまず子どもを観察することで、日頃の些細な変化に気づくと共に、子どもの心の内面を理解することができるのであり、それが子どもを受容し、共感することにつながる。今回、半日観察記録を用いて、学生の観察内容を「行動観察」「内面観察」「保育者の援助観察」の三つに分類することができた。それを「気づき」の段階まで進めようとするとき、基礎となる知識と体験から振り返る「省察」が重要である。半日観察後の保育士との「振り返り」において、学生は子どもの背景を知り、半日観察で気づいた事柄を直接、質問することで保育者の行動の意図を汲み取ることができる。これは、学生の次への学びに生かされるだろう。この振り返りの経験を積み重ねることは、自ら学びながら「省察」するスタイルを確立していくことにつながる。その省察には、保育士による観察後の助言が重要であり、子どもの発達を理解しよう、子どもの非言語の言葉も理解しようとする内面理解の姿勢を後押しすることになる。学生の幼児理解が、「保育者のまなざし」につながるよう援助する役割を保育者が担っているのである。このような個別の観察をまず第一歩として取り入れることで、特別な支援・援助が必要な子どもたちの保育を当たり前に行う保育力につなげていけるのではないかと考える。

連携保育室としても、学生とともに子どもの保育を行い、振り返りの中でその日の保育の印象に残ったエピソードが語られることは、保育者自身も日頃の見えない子どもの姿などを理解するきっかけになる事もあり、保育の振り返りとして効果があるといえる。

この半日観察が、学生の学びの援助をすると共に保育室の保育の質をも高めることにつながるため、双方にとってより効果が発揮されるような方向づけを行うことが、今後の課題である。

引用文献

- 入江礼子・小原敏郎（2019）『こどもの理解と援助 子ども理解の理論及び方法
ドキュメンテーション（記録）を活用した保育』萌文書林
- 岩田純一（2011）『子どもの発達の理解から保育へー〈個と共同性〉を育てるためにー』ミネルヴァ書房
- 鯨岡峻（2013）『子どもの心の育ちをエピソードで描く』ミネルヴァ書房
- 倉橋惣三（1934）『幼稚園保育法真諦』東洋図書株式会社
- 汐見稔幸・大豆生田啓友（2018）『新しい保育講座② 保育者論』ミネルヴァ書房
- 高嶋景子・砂上史子・森上史朗編（2011）『最新保育講座3 子ども理解と援助』ミネルヴァ書房
- 吉田満穂・中川智之・片山美香（2018年3月）『保育実践における保育者の気づきの意味』兵庫教育大学
教育実践論集 第19号
- 大宮摂子（2018）『保育室を活用した保育者養成教育の事業報告書』愛知淑徳大学福祉貢献学部発行